

北イエメンの文化地理学的考察

—装身具を指標として—

向 後 紀代美

1. はじめに

1981年7月、アラビア半島南西端の国、イエメンを訪れ、装身具の調査をおこなった。主な調査地は、北イエメン（イエメン・アラブ共和国 Yemen Arab Republic）の首府サヌアとタイズ、ホデイダの諸都市と南イエメン（イエメン民主人民共和国 People's Democratic Republic of Yemen）のアデンである（図1）。この稿ではサヌアの旧市街にある銀細工屋街を中心に、装身具より見たイエメンの地域性を明らかにしたい。

調査の指標とした装身具は、イエメンをはじめとする西南アジアの国々では、衣生活の一部として欠くことのできないものである。ゆえに小さな装身具ひとつにも、その国の自然条件、歴史的背景、社会、経済などが反映されており、地域による特色が見られる。

また調査地イエメンはアラビア半島で珍しい非産油国である。クウェートやサウジアラビアのような目ざましい発展はなかった代わりに、古い伝統的なアラビアの生活、文化が残存している。

筆者が1980年3月から1982年1月まで滞在したクウェートでも、古い銀の装身具はイエメン製のものが多かった。アラビアの装身具を研究するためには、アラビア半島文化の発祥の地、イエメンを訪れなければならないフィールドである。

2. 自然環境と歴史的背景

ローマ時代の学者プリニウスは、イエメンを「アラビア・フェリックス Arabia Felix（幸福のアラビア）」と呼んだというが、「砂漠アラビア」の国クウェートからサウジアラビアを横切って空路北イエメンに入った筆者にはこのことばがまさに実感として受けとれた。

どこまでも続く紅茶色の平坦な砂漠の向うに突然雲海が見え、その下に緑の畑や樹木におおわれた山国イエメンがあった。雨量はアラビア半島では多い方で、冬暖く、夏でも冷房を必要としない快適な気候（海沿いの低地をのぞく）である。

そのため紀元前9世紀頃からすでに大文化を生

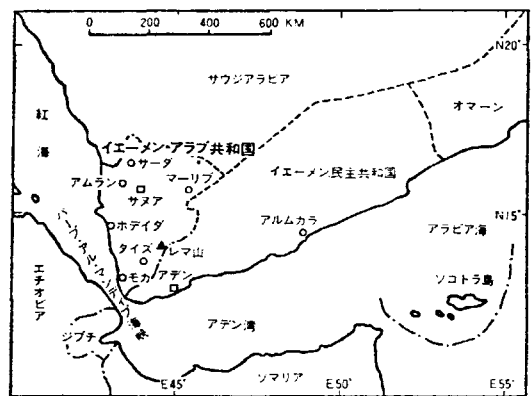


図1 地域概念図

表1 サヌアの年間気温・雨量（1975年）

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
温 度 (°C)	最低	0	4.6	5.0	6.6	6.8	5.9	9.6	10.0	6.0	-1.3	1.0	-3.7
	最高	25.0	26.0	27.0	27.0	26.1	28.3	29.8	27.4	29.8	24.4	25.0	26.2
	平均	13.4	15.0	15.2	17.5	18.6	14.3	19.8	18.8	17.3	12.7	13.6	13.4
降雨量 (mm)		0	0	35.7	102.1	4.2	6.3	44.7	162.5	22.7	0	0	6.5
降雨日数 (日)		0	0	6	18	1	2	4	20	4	0	0	0

cf. クウェイト { 最低気温 10.5°C 降雨量 130mm (年)
最高 " 40.0°C
平均 " 24.9°C

み出すだけの灌漑農業があったといわれ、有名なシバの女王がでたサバ王国やヒムヤル王国などの古代南アラビア諸王国が栄えた。しかし紀元後4～5世紀頃から、洪水によるマーリブの大ダム の欠壊などが原因となって、農業生産力が衰えるとともに、人々は遊牧の民となって半島北部へと流出していくようになったといわれる。

しかし、その後も乳香や没薬などの香料の産地として、また中国、インドと地中海（ギリシャ、ローマ）の間の交易の中継点として知られてきた。このような自然、歴史などの条件が装身具にどのような影響を与えているかを次に見ていきたい。

3. 緑のアラビアとトルコ石装身具の欠如

北イエメンの首府サヌア（実際の発音はサナアに近く聞える）では、貴金属装身具をあつかう店は専門店街を形成し、城壁に囲まれた旧市街に1ヶ所、新市街に2ヶ所と数十軒ずつまとまっている。

旧市街の店は、一般的に間口が狭く小規模で、主として伝統的な銀の装身具をあつかっている。それに対し新市街の店はイタリー製などの輸出品を含めた金製品が中心で、店舗も広い。

石の種類は、赤い珊瑚と黄色い大粒のコハクが多く見られた。また実際身につけているのは模造を含め赤い珊瑚のネックレスが多かった。もっともイエメンの女性はアフリカ系（エチオピア、ソマリアなど）をのぞき、全身をスィターラという綿布でおおい、顔もレスマー（目だけを出す覆面）やマグモック（レスマーの上にさらにたらずしぼりの布）でかくしているのだから、装身具を見るのは容易ではなかった。

イエメン特産の石としては古くから紅玉髓（Carnelian）が有名である。Mackeyによれば、パキスタンでは1930年頃まで Etched Carnelian のビーズがつくられていたが、その職人たちの間でイエメン産の Carnelian は最上質のものと評価されていたという。

イエメンの装身具に使用されている石を見て気がついたことは、他のアラビア諸国で多用されているトルコ石がほとんどないことであった。トル

コ石はアラビアに限らず、イラン、エジプト、チベット、アメリカ西部、メキシコなどの乾燥地で主として珍重されている石である。

その理由は明らかではないが、自然環境と関連が深いように思われる。たとえばトルコ石の青色は、砂漠の民にとって生命の根源である「水の色」であるためか、トルコ石だけでなく、青い色の石やガラスに邪眼（Evil Eye）をふせぐ効果があると信じられている。

日本でも「紅白」はおめでたい色という通念があるが、水と緑の豊かなイエメンでは、青ではなく、赤が珍重されるようだ。インドのヒンドゥ教徒にとって、赤は幸福の色、ネパールでは珊瑚が珍重され、とくに赤い色が濃いほど価格も高価になる。赤は血の色であり、けがよけ、病気よけになるという。

紅海や地中海は古くから珊瑚の産地として知られる。また前述したようにイエメンはその地理的位置から東西交流の中継点として古くから栄えてきた。これらの諸条件が、イエメン装身具の石の種類にも影響を与えているものと思われる。

4. 装身具にみるイスラーム教の影響

イエメンの住民は、大部分がカハターン・アラブ族（南アラブ族、ちなみにマホメットはアドナール・アラブ——北アラブ族に属す）で、イスラーム教徒である。スンニー派のシャーフイ派が約6割、シーア派のサイド派が約4割、それに少数のイスマイル派である。

イスラーム圏の装身具で最も典型的なのが、円筒形のお守り（Hirz）であるが、サヌアの旧市街の銀細工屋街でも最も目についたのがこれである。イエメンでの名称はキターブ・ホッダーまたはキターブ・ムシャグランであった。キターブとはアラビア語で「本」であるが、コーランをもさす。コーランの章句が書かれた紙を入れるのでこのように呼ばれるのであろう。片側がふたになっていてあくものと、あかないものがある。通常はペンダントとして女性が用いるが、イエメンでは男性がジャンピーア（三日月型の短剣で腹にさす）のベルトにつけ、サイフとして用いることもある。

イスラーム教では、偶像崇拜を厳しく戒めている。絵画や彫刻だけでなく装身具にも宗教の規制が及んでいることが、イエメンの装身具を見ているとわかる。インドのヒンドゥ教徒のような神像はもちろん、動・植物模様すらほとんど見られない。三日月形、三角形、正方形、長方形などの形を基礎とし、それに鈴などを加えて組み合わせたものである。これは、北アフリカから中央アジア、インド西北部まで、イスラーム圏に広く分布しているパターンである。

またイスラーム文明では、幾何学模様には哲学的意味がもたされている。三角は「精神」、丸は「永遠」、または「ねたみに対しての加護」、うず巻きは「進歩」などである。アラブで暮していると日常生活でよくこの幾何学模様を目にする。三日月はイスラーム寺院や救急車に、三角はゆりかごにつける布製のお守りや車の後に……など。装身具の幾何学模様も、これらの意味と無関係ではあるまい。

イスラーム教は、また製作技術にも影響を及ぼしている。イエメンの装身具には、チベットやネパールのような精巧な打ち出し模様の細工がみられない。これは具象的模様を金属に打ち出す必要がないことからくる技術的制約と考えられる。

5. 装身具の製作者はユダヤ教徒であった

イエメンにはイスラーム教徒以外に、少数のユダヤ教徒が古くから居住していた。実はイエメンの装身具を長い間製作してきたのはこれらユダヤ人たちであった(インド人もわずかにいたが……)。ユダヤ人は装身具のみでなく、織物、ステンドグラス、刃剣などのイエメンの手工業を一手にひきうけて製作してきた。これらの手工業品は、どれも技術水準が高く、外国にまで輸出されていた。

ちなみに、イエメンに限らずアラブ世界で装身具を製作してきた人々は、非イスラーム教徒が多かった。

すなわち

- (1) ユダヤ人(ユダヤ教徒)——イエメン、サウジアラビア(ヒジャーズ地方)北アフリカの諸都市

- (2) アルメニア人(キリスト教徒)——レバノン、ヨルダン、イラク、シリア
 (3) マンデ人(サービア教徒)——イラク南部、イラン西部

などである。その理由をAl-Jadir Saad(1981)は、ベドウィンの社会では、直接暮しに貢献しない手工業は価値を認められていなかったからだとして述べている。

イエメンのユダヤ人たちは大部分イスラエルが建国されたために、1948～50年に実施された「Flying Carpet Operation」で、イエメンを去ってしまった。その数は5万とも8万ともいわれている。そのため、現在ではかつてのような精巧な銀細工の技術は失なわれつつある。サマアの旧市街で販売されている銀の装身具も、その多くは古いもので、新しく製作しているのは、一ヶ所しか見られなかった(ラマダン中で閉まっている店も多かった)。

6. 出稼ぎとマハル(婚資)と装身具

1982年のイエメンの総人口は7,362,000人であり、この他に海外への出稼ぎ人口が140万人いる。出稼ぎ先はクウェート、サウジアラビア、アラブ首長国連邦などの産油国で、1975/76年で国民総生産の約45%にあたる本国送金を行なっている。一説によると、サウジアラビアの金融関係はイエメン系の人々で占められているという。

イエメンの産業は、原始的農法に頼る雑穀や果実(ブドウ、オレンジ、ザクロ)、野菜、コーヒー(有名なモカコーヒー)、カート(葉の形が茶に類似する覚醒作用のあるイエメン独特の植物)、綿花などの栽培や、羊、山羊、ラクダの遊牧といった一次産業が中心で、近代的工業はほとんど見られない。鉱産物は岩塩のみといった経済状態のため、青壮年の男子労働者は国外に職を求めて流出する。

またアラブでは結婚に際して、男性が女性の家に対して一定の金額(マハル 婚資)を払わねばならないという風習があるため、未婚の男性は特に多額の金が必要なのである。マハルの額は、サマアで聞いた例では、1万～7万リアル(約50～350

万円)であった。これは、1人当り国民所得が420米ドル(1979年)のイエメン人にとって、大へんな負担である。タクシー運転手のモハメッド氏の場合、10才から8年間サウジで建設労働者として働き、その時貯めた金でマハルを払い花嫁をめとり、家を建て、かつ買って来たベンツでタクシー業をはじめたという。

Myntti (1979)によれば、イエメンではマハルは、お金のほかに、時計、ドレス、化粧品、石けん、金などでわたされるという。そのうち多い時は半分、すくなくとも10分の1は花嫁個人の所有となる。そのとり分が、女性が自由に使ったり、貯蓄したりできる個人財産となるわけだ(女性にとってこれが、生涯最高の収入となる)。それらは、生活費にあてる必要はないという。

女性の財産は、昔から現在に至るまで、金や銀の装身具として身につけられた。それらは簡単に売ることもでき、一般的にみると価格が下がることはない。また美しく身を飾り、戦争など非常のときには、そのまま全財産を身につけて逃げることもできる。

このように装身具は、イエメンの経済、社会とも密接な関係を有しているわけである。イエメン経済の向上を反映してか、サヌアのみでなく、タイズやホデイダの町でも、装身具の金属は、銀から金へ中心が移っている。サヌアの旧市街の銀製品は価格の決定法が、グラム当りの重量+加工賃といった西南アジアに一般的な方法ではなく、かなりいいかげんなことから推察して、銀の装身具

がもはや実用というより、観光客目当ての骨董品になりつつあるのではないかとの感を持った。

7. おわりに

サヌアの銀細工店でよく見かけたマリア・テレサ銀貨は、1751年にウィーンで鑄造されて以来、アフリカ・中東の貿易の通貨としてつい最近まで広く通用してきた。この銀貨は、銀の純度が高いため、溶かして素材としたり、そのままネックレスやペンダントにして用いられている。

この銀貨のみでなく、イエメンの装身具には、インダス文明、シュメール、十字軍、フィンランドなど様々な時代や地域の装身具と同じ形態、技法が見られ、東西文化交流を示唆するものが少なくない。

早急に結論を出すのは誤りであろうが、今後は、他の文化要素などとの関連も合わせて考えて、より緻密な研究を進めていきたい。

主要参考文献

- Al-Jadir, Saad (1981): Arab & Islamic Silver, Stacey International, London
Myntti, C. (1979): Women and Development in Yemen Arab Republic, German Agency for Technical Cooperation, Ltd.
外務省情報文化局監修 (1982): 『海外生活の手引』第12巻 中近東篇 Ⅲ, 世界の動き社

(11回生)

Regional Characteristics of Yemen Arab Republic in terms of Ornaments
Kiyomi KOGO